

THE WEEKLY NEWS OF EAST KISARAZU



国際ロータリー第2790地区
木更津東ロータリークラブ

2021-22年度

●例会日 毎週水曜日 PM12:30~1:30 ●例会場 オークラアカデミアパークホテル TEL 0438-52-0111
●事務局 木更津市朝日1丁目2-29 シグママンション朝日B棟105号 TEL 0438-25-0716 FAX 0438-25-0718

2021-22年度国際ロータリーテーマ

奉仕しよう みんなの人生を豊かにするために
SRVE TO CHANGE LIVES

第34回例会 NO.2555

2022年4月13日

【坂井健治会員のペット】



【ラッキーちゃん】

■司会進行
有島敏夫SAA



◆四つのテスト
藤野宏治会員



◆点鐘 12時30分 堀内正人副会長

◆Rソング斉唱 「我等の生業」

◆出席 会員41名 ◆出席率 76.31%
出席29名 ◆前々回出席率 72.22%
欠席12名 ◆修正後出席率 80.55%

◆欠席者【敬称略】

石井文子・嶋津正和・鈴木秀幸・趙 亜南・
中野麻美・林田謙治・宮寺順子・渡邊元貴・
渡邊慎司

◆メイクアップ

・4/9 2022学年度 ロータリー米山記念奨学生
カウンセリングオリエンテーション
渡邊慎司

ホームページ <https://kisarazueast-rc.jp>

木更津東ロータリークラブ

会 長 渡 邊 慎 司
幹 事 吉 田 和 義
編 集 大 岩 も え

国際ロータリー第2790地区

RI会 長 シェカール・メータ
地区ガバナー 梶 原 等
ガバナー補佐 鈴 木 荘 一

◆ゲスト紹介 堀内正人副会長
◇川畑嘉文 (かわばたよしふみ) 様

◆誕生日祝い
鈴木正弘 (4/12)



◆結婚記念日祝い
鈴木正弘 (4/7) ・鶴岡大治 (4/11)
坂井健治 (4/12) ・加藤智生 (4/13)



■会長挨拶代理 堀内正人副会長



代理で登板しております。副会長の堀内です。常々、山田 PDG は会長挨拶ではロータリーのことを話すようにとおっしゃられているので、今日はロータリーの話をすることにします。

先日、RLI の part3 という会合に参加してきました。RLI とは The Rotary Leadership Institute の略称でロータリー・リーダーシップ研究会とのことです。パート1~パート3の3回を修了すると一応「あがり」になりまして、当クラブからは多分6名参加した内、石田さんと松岡さん、そして私の3人がこの計3回の修練を乗り切った、ということになります。この後、この3回を乗り切った人に対しては特別に、卒後コースやDL養成コースといった次のステージが用意されているとのことです。

RLI は3日間もあるのですが、是非、入会3年目ぐらいの皆様はご参加いただくことをお奨めします。もちろん、それより入会歴が浅くても長くても参加した方が良いと思います。

皆さんは普段、ロータリーについて延々と考えたり、誰かと語り合うという時間帯は無いと思います。その点、RLI はロータリーのことしか話をしないので、今までに無い、かなり貴重な経験になると思います。また、RLI は参加する全員がロータリアンで、県内の色々なクラブから集まってきます。同じロータリーと言っても、クラブによって事情は相当に異なる、というのを知ることができるのもなかなか得難い機会であると思います。こういう場で得たものをクラブに持ち帰って次に繋げる、なんて大層なことではなくて、自分や自分のいるクラブと他のロータリアンをちょっと比較してみる、ということがクラブの将来にとって良いことではないかと思えます。

私はもう入会して7年とか経っていて、地区でも役に就いていますので、良くも悪くも自分の信念のようなものができてしまっております。ですので、なかなか素直な気持ちで参加できないまま終わったな、という感があります。多分、ロータリーに入会して3年目ぐらい、つまり委員長や理事などの役が回ってくる少し前のタイミングで受講すると丁度いいのではないか、と思った次第であります。

次回は来年の開催になると思いますが、是非参加することをお奨めします。

■幹事報告

吉田和義幹事



1.第10回理事会報告

出席者 8名

◆審議事項

- ①2022年3月分収支報告の件
→承認されました。
- ②5月8日(日)春の野外例会の件
(ハイキング例会) 会員・家族 2,000円で
→承認されました。
- ③太田山公園姉妹クラブ締結記念碑の件
→承認されました。
- ④図書館寄付金の件 50,000円で
→承認されました。
- ⑤新会員推薦の件 鈴木 隆昌様
日本製鉄(株)東日本製鉄所 品質管理部長
→承認されました。

2.幹事報告

- 1)木更津市国際交流協会から、令和4年度木更津市国際交流協会理事推薦書についての依頼書が届いておりますので回覧いたします。
- 2)4月のロータリーレートは122円となっております。

3.他クラブからのお知らせ

- 1)木更津 RC「週報」が届いておりますので回覧いたします。

4.その他のお知らせ

- 1)公益財団法人 米山梅吉館より「春季例祭」のご案内が届いておりますので回覧いたします。

5.回覧

- ・木更津市国際交流協会から、令和4年度木更津市国際交流協会理事推薦書
- ・木更津 RC「週報」
- ・公益財団法人 米山梅吉館より「春季例祭」のご案内書



奉仕しよう みんなの人生を豊かにするために

■委員会報告

◆ニコニコボックス報告・出席報告
親睦出席委員会 近藤直弘会員



◇倉島和弘会員

国際奉仕委員長の倉島です。本日はフォトジャーナリストの川畑様をお招きしての卓話です。どうぞよろしくお願ひいたします。

◇吉田和義会員

本日の川畑様の卓話、楽しみにしています。

◇坂井健治会員

4月12日にお祝いのお花を頂きありがとうございます。早いものでもう16年たちました。これからも仲良くしていきたいと思ひます。ありがとうございます。

◇加藤智生会員

本日、結婚62記念日を迎えることができました。ありがとうございます。

◇鈴木正弘会員

4月7日の結婚記念日に美しい花束をいただきありがとうございます。4月12日誕生日にお祝いをしていただきありがとうございます。これからもよろしくお願ひ致します。

■例会アワー

◆国際奉仕・ロータリー財団委員会
倉島和弘委員長



川畑さんについてご紹介致します。1976年に千葉県に生まれ、ペンシルベニア州立大学をご卒業され、ニューヨークにあるニュース社にお勤めになられたと聞いております。9.11を取材し、それをきっかけに写真をはじめられ、2005年にフリーランスのフォトジャーナリストになられたそうです。写真展も開催され、さまざまな賞も受賞されています。また、書籍の方も出されています。名刺もカメラマンらしいものです。

◆卓話者
フォトジャーナリスト
川畑嘉文様



「無関心のすぐそばにある人生」

みなさんこんにちは。改めまして、フォトジャーナリストの川畑嘉文です。まず、初めこのような素晴らしい会にお声がけ下さった吉田さんに厚くお礼申し上げます。

今日は非常に時間が限られておりますので、早速始めさせていただきます。まず簡単に、なぜ私が写真を撮るようになったのかをお話いたします。

米国のペンシルバニア州立大学で政治学を学んだ後、ニューヨークのマンハッタンにある日系の雑誌社に記者として就職しました。そのころ起きた事件が、9.11 同時多発テロです。今から 21 年前、私が 25 歳の時です。朝起きると私が住んでいたアパートから肉眼で確認できました。その日、撮影した写真がこちらです。

この時の詳しいストーリーに関しては拙著「フォトジャーナリストが見た世界」をご覧くださいただければ幸いです。



この事件をきっかけに
1 枚の写真がもつ影響力、
そんな写真を撮りたいと強く感じるようになりました。

どんどん写真にのめり込んでいった私は、9.11 の翌年、働いていた出版社を退社してポルトガルから陸路でアフガニスタンを目指しました。米軍侵攻後の同国を取材してみたかったというのがありますが、学生時代に貧困問題や紛争などを勉強していたので、途上国を深く知っていたという理由もあります。8 ヶ月に及ぶ取材旅行で経験したことは今でも忘れられません。当時インドでは貧しさや差別ゆえに生活苦に陥り、路上で倒れ放っておかれている人がいました。この地球上に、人が路上で死にかけている社会があることを知り、強い衝撃を受けました。皆さんもご存知かと思われそうですが、そんな人々に手を差し伸べる活動を行っているのが、「マザーテレサの家：死を待つ人の家」です。私はこの施設でボランティアをさせていただきました。

ただ、介護の資格も持たないわたしができることといえば、寝たきりの高齢男性の床ずれ部分をマッサージすることぐらいです。毎日、命を引き取る直前の意識のない人々にマッサージをしていると、この行為に意味があるのかどうか、わからなくなってきてしまったのです。そして、ぼくは施設のシスターに尋ねたんですね、するとシスターは「苦しい人生を歩んできたこのか弱きヒトは、苦しみを抱えたままこの人生を終えるのか。それとも今私たちが与えることのできる温もりを感じながら旅立つのか。きっとこの方は人生の最後にあなたの優しさを感じながら天に召されるのですよ」と、教えてくれたのです。

アフガニスタンでは初めて小学校に通えるようになった女の子たちを取材しました。タリバン政権が女性教育を禁止していたのですが、タリバン政権が倒れたためによりやく学校に行けるようになったのです。

ネパールでは病気を抱えながらも治療を受けることができない少年など、多くの人々との出会いがありました。私たちが当たり前のように享受している自由は、世界では当たり前ではないのです。そんな世界を見て私が感じたことは、「この世界はどこまでも不公平で、そして、人生は不条理で溢れてということ」です。そして、こんな不公平な社会に私自身が何をできるのかと考えるようになりました。

帰国した後は東京の広告制作会社に就職しました。ここで 2 年間の修行をつんだあと、フリーランスになり、海外取材を始めたのです。さて、フリーランスになって、約 15 年。これまでたくさんの方々を支えられ、様々な現場に出ました。大規模なデモの取材や、自然災害の取材、時には紛争地帯のそばで難民たちを取材してきました。

今からは難民についてお話ししたいと思います。少しだけ、データで難民の状況を見えます。難民とは紛争や暴力、迫害によって移動を強いられた人々のことです。現在世界には 8240 万人います。ロシアによるウクライナ侵攻もあり、この数はずっと増加し続けています。

最大の受け入れ国 -- トルコ

1. トルコ 370 万人
2. コロンビア 170 万人
3. パキスタン 140 万人 ウガンダ 140 万人
4. ドイツ 120 万人

ちなみに日本は 2020 年 47 名を受け入れました。今年はウクライナ難民を受け入れているので、もう少し増えるでしょうか？それにしても少なすぎる。国際社会における日本の役割というのも考えてみる必要があるのではないのでしょうか。

難民発生国 -- 68%が 5 カ国に集中

1. シリア 670 万人
2. ベネズエラ 400 万人
3. アフガニスタン 260 万人
4. 南スーダン 220 万人
5. ミャンマー 110 万人

難民のうち 18 歳未満の子どもの割合は 42%。

では実際に私が取材した南スーダン難民の写真を少しかだけお見せします。

2016年7月、南スーダンの首都ジュバで、ディンカ族出身のサルバ・キール大統領派と、ヌエル族出身のリヤク・マシヤール元副大統領派が衝突。両者の戦闘は各地に広がり南スーダンは内戦状態に陥りました。

多数派を占めるディンカ族の兵士や武装勢力が他部族への虐殺行為を働いた。その結果 220 万人以上もの人々が隣国に流出しました。ウガンダには 140 万人以上が逃れています。

わたしが訪れたのはウガンダ北部、南スーダン国境から車で約 30 分の場所にあるビディビディ難民居住区です。国境に到着した人々は、国境からは UNHCR が運行するバスでビディビディに移動してきます。多いときには 1 日に数千人もの人々が到着しました。到着後手洗いをして、難民登録を行います。この登録を終え、やっと難民と認められ、支援を受け取ることができます。国連のコンパウンド内に一泊し、翌日にはトラックに乗せられて各居住区に移動します。ちなみに私が「難民キャンプ」ではなく「居住区」と言うのは、ウガンダ政府が半永久的にこの地を南スーダン難民たちに供与することを決めたからです。これは非常に珍しいケースです。どの受け入れ国もいずれは母国に帰ってもらいたいと考えますが、ウガンダだけは特別です。居住区には市場(いちば)もすでに形成されています。干物や、野菜、洋服に木炭、日用雑貨まで様々なものを扱う商店があり、賑わいを見せる。営んでいるのは難民たちだけでなく、地元のウガンダ人も多い。商品の相場はユンベの街中の商店よりも安く、わたしを乗せた運転手も度々買い物をしていました。ただし、着の身着のまま逃れてきた難民たちはほとんど現金を持っておらず、満足な買い物はできません。職を手に入れば賃金は得られますが、居住区ではその機会は皆無に等しい。二束三文で買ったたかれることを承知の上で、与えられた支援物資を市場で換金し、魚や肉、野菜類を手に入れるしかないのでした。

この写真は墓地です。
小さな墓地が多いのがわかりますか？

マラリヤや下痢、栄養失調で命を落とす子どもが圧倒的に多いのです。紛争の犠牲者はいつも子どもや高齢者など弱い立場の人々なんです。

ローダさん

この写真の少女は 14 歳のローダ・セニャさんです。61 歳の祖母と 10 歳の妹と三人で暮らしていました。彼女のお腹にはあかちゃんがいます。

2016 年夏、南スーダンにあるポジュール族の彼女の村が敵対するディンカ兵の襲撃に遭いました。家は焼かれ、両親は目の前で殺害されてしまいました。彼女自身は兵士たちから何度も暴力を受けたが、なんとか村を飛び出し茂みの中に身を潜め追っ手から逃れることができました。

その後、木の根をかじりながら、茂みの中を数ヶ月の間移動し、同年 9 月隣国ウガンダ共和国の難民居住区に到着したのです。おなかの赤ちゃんは襲撃の際にできた子どもです。彼女は産むことを決めました。でも敵対するディンカ族の子どもをコミュニティが受け入れるとは思えません。彼女の将来はどうなってしまうのか、非常に心配です。ビディビディ居住区ではこんな子どもたちが今もたくさん暮らしているのです。

さて、私はジャーナリストとして様々な取材を行って来ましたが、**達した結論はジャーナリストの力は現場では限りなく無力であることです。**お腹が空いて泣きわめく少年に食料を渡すわけでもないし、怪我を追った少女に医療行為を施すこともできない。それに、「支援のために戻って来たジャーナリストは一人としていない」と現場で取材を断られたことは一度や二度ではありません。取材対象者からだけでなく、欧米の NGO 職員からも嫌われているのをひしひしと感じます。そんな私が始めた活動が NGO による緊急支援活動への参加です。難民支援以外にも含めますが、これまでハイチ大地震やトルコ大地震、フィリピン台風、シリア難民支援、などなど多くの現場を訪れました。大抵の場合支援物資の配布が最初に行う支援活動と言えます。実際に現地に入りこれらの活動を行いながら取材を行うことで、お互いの間に信頼関係が結ばれ、心を開いてくれたケースもあります。

初動調査(被害状況とニーズを把握)

↓

現地スタッフの採用

↓

受益者の選定

(コミュニティリーダーと調整 クーポンを渡す)

↓

支援物資の調達

(値段の見積もりや輸送方法、保管場所の確保)

↓

物資配布

↓

その後の調査

↓

長期支援の必要性を考察

2014 年に取材をさせてもらったファデル君と家族のストーリーをお伝えします。

私が訪れた時、トルコ南部の街スルチュにある薄暗い倉庫にファデル君(13 歳)はいました。下半身を毛布に覆い横たわっていました。その隣ではお父さんのムスタファさん(55 歳)が毛布を直してあげています。シリア北部のアインアラブ(クルド名コバニ)近郊の村に暮らしていたムスタファさん一家がスルチュに到着したのは夏のこと。ムスタファさんは季節労働に携わるなどし家族はのんびりと暮らしていましたが、ある日突然隣家に爆弾が落とされました。破壊され煙をあげる家、炎上する車、

住人たちは悲鳴をあげながら逃げ惑ったと言います。ムスタファさんは家族を守るため、全てを捨ててトルコへ逃れることを決めました。空爆の際、自家用車も破壊されてしまったので親戚たちが車を出してくれました。主要道を使えば国境ゲートまでは約 10 キロの道のりですが、イスラム国の支配下にあったために迂回路を選びました。遠回りをして国境線まで来たものの、そこから国境ゲートまで行く事ができません。そこまでの地域もイスラム国がコントロールしていたためです。また、両国の関係が悪化していたため国境が閉じていると聞きました。3日間、家から持って来ていたわずかばかりの食糧で生きながらえながら国境線に留まりましたが、とうとう緩衝地帯を超えてトルコへ抜ける事を選びました。12 人の子どもたちを引き連れトルコに向かって歩いていたら、突然大きな火柱が上がり轟音が響き渡りました。と同時に長男のマフムード君 (18 歳) の身体が吹き飛ばされたのです。家族たちは一瞬何が起きたのが理解できませんでしたが、次の瞬間緩衝地帯に敷設されていた地雷を踏んだのだと気づきました。

血だらけのマフムード君と傍を歩いていて巻き込まれたファデル君はトルコ軍の車に乗せられすぐにスルチュの病院に運ばれました。しかし、残念ながらマフムード君の命は助かりませんでした。

一方、シャンルウルファやディヤルバクルなど医療施設の整った大きな病院に運ばれ治療を受けたファデル君でしたが、両足の膝から下を失ってしまいました。事故後 25 日もの間食事もとらず身体を動かさずともしなかったファデル君が会話をするようになり食事もとれるようになったのは最近のことです。それでも、時折事故を思い出してはぼーっと宙を見つめ何の反応も示さなくなるといった放心状態におちいってしまうそうです。両親が今一番つらい事はファデル君が毎日のように「お兄ちゃんはどこにいるの?」と尋ねること。心に大きな傷を負ってしまったファデル君を慮って、家族は「(お兄さんは) 隣町に働きに出ているよ」と本当のことは伏せています。

トルコ政府はファデル君に車椅子を無償で提供し、今後も治療費を無料とするそうです。しかし、2 日に一度病院に連れて行かなければならないためムスタファさんは仕事に着く事ができません。シリアから持参したお金で食糧を買い細々と暮らしていますが、いつまでこの生活が続けられるかわかりません。支援を受けたのは 1 回のみ。これから本格的な冬を迎えるための準備も始めなければなりません。

「戦争に負けた日本人なら私たちがどんなに苦しい状況にいて、どれほどの悲しい気持ちを抱えているかわかるでしょう? どうして何もしてくれないのですか。食糧や物資の支援もありがたいけれど、心の支援が欲しい」ムスタフ

アさんは目に涙を浮かべ強く訴えました。

私の活動について早足でお話しいたしましたが、私たち一人一人の個人ができることは限られています。コロナが流行し、自分たちの生活だって脅かされるこんな時代ですから。だから、私たちが行える活動は決して大きいことでもなくてもいいと私は考えます。それは、少しの募金かもしれないし、今日の講演を家族や友人と語り合うことでも良いのではないのでしょうか。

人間の最大の罪とは何か? 人を欺き傷つけることでもなければ、権力を振りかざすことでもない。「人々の無関心」それこそが最大の罪である。社会で起きている不条理や不公平な現実から目をそらさずしっかりと受け止めなければなりません。私の役割とはこの不条理な社会を少しだけ公平にするために、現場に出て彼らに寄り添い、帰国した際には、もがき苦しむ人々の心を伝えることだと思います。これからも頑張っていきたいと思います。ご静聴ありがとうございました。



ありがとうございました



本日のメニュー

◆点鐘 13時30分 堀内正人副会長